¡Hola, amigos!

第０９７号

（ＲとＮの Cádiz からの手紙）

皆さんこんにちは。これはＨＰというより、私達の近況をお知らせする長い手紙のようなものです。そのつもりでお読みください。

更新は毎週、日本時間の金曜朝０４：００時から０８：００時の間に実施します。

臨時休刊の場合は、なるべくその前の週にお知らせするつもりです。

なお、バック・ナンバーは最近三号分のみとし、それ以前のものは順次削除します。

では、今週号へどうぞ。　　２００６年０２月２４日　カァディスにてＲ ｙ Ｎ

☆今週号のトップへジャンプ

現在有効なバック・ナンバーは０９６号（０２月１７日）、０９５号（０２月１０日）０９４号（０１月１３日）の三週分です。各週のトップにあるボタンからどうぞ。

＊今週号＊ No.097（2006年・第08週） ０２月２４日更新

「アフリカを見に・・・」の巻

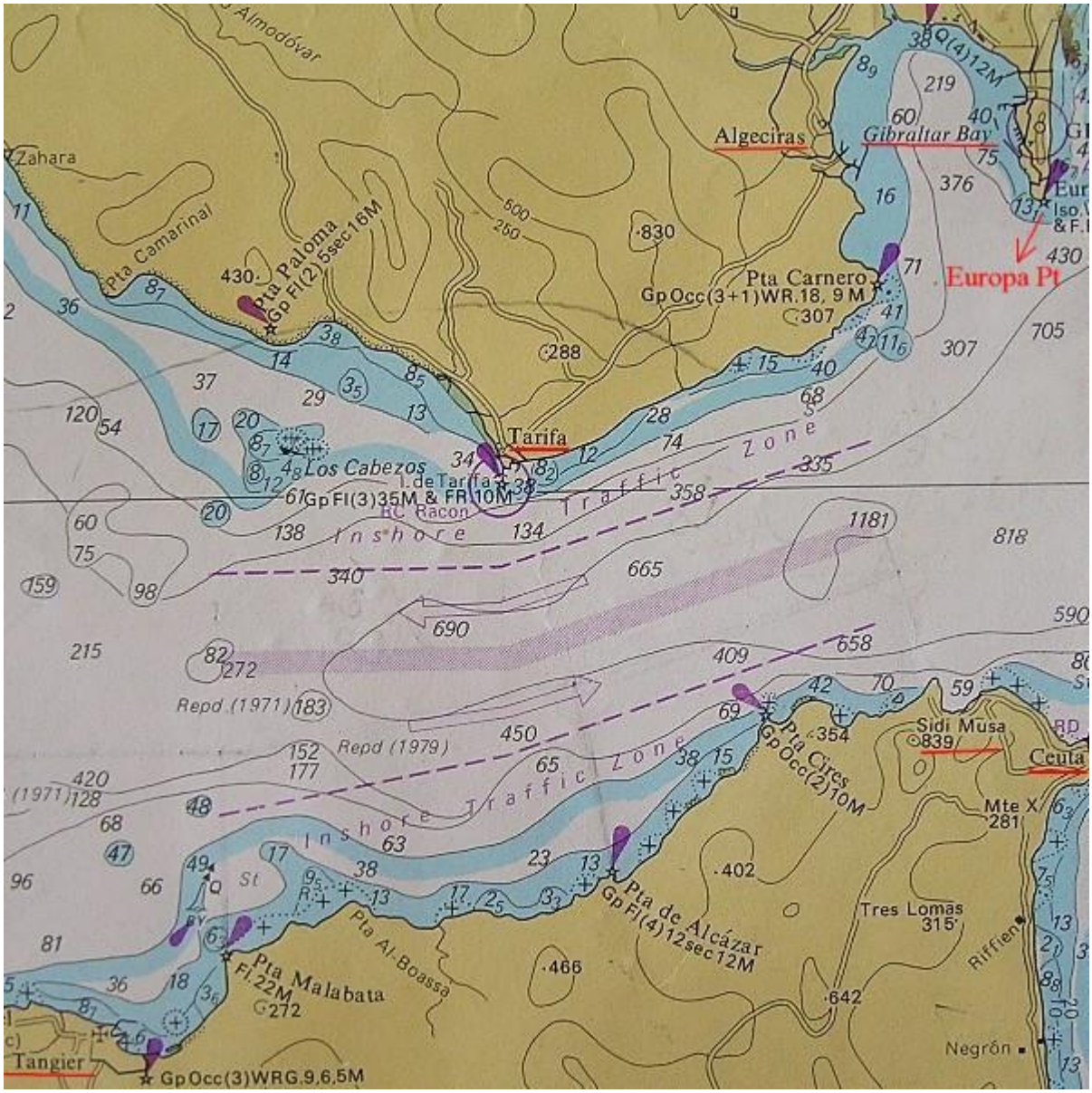
前に住んでいたベナルマデナでは、視界のいいときは部屋の窓からアフリカが見える時がありました。勿論そんな時は海岸へ出たり裏山に登れば、もっと良く見えたのです。初めて窓から見えることに気付いたのは２年目の１２月のことでした。

その次の年、部屋探しのため何度もカァディス通いをして、その途中、ジブラルタル海峡を眼下にみる峠道をバスで通り、車窓からアフリカを眺めました。ソコからは春でも、初夏でも、真夏でも、初秋でも、晩秋でも、常に良く見えていたのです。

そのアフリカを、バスの汚れた窓ガラス越しではなく、冬の澄み切った空気の中でゆっくりと間近に見てみたい。それには海峡に突き出したタリファ Tarifa が一番に違いない。そう思って出かけました。タリファの町はコレまでにも何度もバスで通過はしましたが、降りたことはありませんでした。この町は海峡を挟んでモロッコに最も近いがゆえに昔も今も色々とその影響をモロにうけているようです。

私達が移住してきてからも、多くの密航者がこの町の近くの海岸に上陸しては、治安警察 Guardia Civil に「保護」されるのをテレビの映像で数え切れないほど見てきました。なにしろ、海峡の一番狭いところは１４キロちょっとしかありません。その場所がまさにタリファのすぐ東側なのです。

日本でも報道されたと思いますが、去年は一時期、アフリカ諸国からの密航者がモロッコ国内にあるスペインの飛び地、セウタやメリージャに国境を越えて大挙押し寄せました。しかし、国境警備が厳しくなると再び海からの密航が増えているようです。



ジブラルタル海峡の海図、もうお馴染みですね。中央にタリファ Tarifa、右下にセウタ Ceuta、左下はモロッコの玄関口タンジール(英語綴りは Tangier、スペイン語では Tánger＝タンヘル)。右上のジブラルタル湾(スペイン語ではアルヘシラス湾)に面した Algeciras アルヘシラスからタリファに向かう道路が、何度もバスで通った峠道です。ここから眼下に見る海峡とその向うのアフリカの様子は素晴らしい。セウタのすぐ西側に Sidi Musa 839 とあるのが見えますね。標高は８３９メーターと大したことはないんですが、ごつごつした岩肌の山の威容はいかにもアフリカ！という感じを受けます。海峡の中央部にマゼンタの太線や矢印や Inshore Traffic Zone の字などが見えますね。これは船の交通整理のための表示で、海峡通過船はレーダーで監視されているし、ジブラルタルの英国海軍からは誰何もされます。

カァディスからバスで１時間４０分でタリファの新市街に着きました。バスセンターから１０分ほど歩くと、この旧市街への入り口の城門、ここから先は異次元の世界。

城門の上にはこんなタイルの銘板が貼り付けてありました。「１２９２年9月２１日にムーア人達を撃ち払った勇猛王サンチョ４世、タリファの町の高貴にして誠実なる英雄」と言うような意味だと思います。この町はスペインでは最初にムーアに侵入されたらしい。しかしこの銘板のようにムーアを追い払ったのも早い時期だったようで　ムーア最後の要衝グラナダの陥落は１４９２年だそうですから２００年も早い。

旧市街に入ると例によって例の通り、イスラム支配だった町は道路が一段と狭い。

しかし、この町では何故か例の玉石を敷き詰めた道路は多くはありませんでした。

一方こちらは新市街。この町は欧州中の若者が集まるサーファーのメッカでもあるんです。町の西側の浜の沖はカァディスと違って急深で、大西洋のウネリがモロに押し寄せるのでサーフィンにはもってこい。更に海峡を吹き抜ける強い風がウィンド・サーフィンにもカイト・サーフィンにもお誂え向きなんですね。だから町中安い宿泊施設オスタル hostal やペンション pension とサーフ・ショップだらけです。

この写真にも hostal, pension, custom boards なんて綴りが見えるでしょう？

さて、再び旧市街。こんな風に旧市街のあちこちには、古い城壁をそのまま一部取り込んだ建物がたくさんあります。城壁はムーア人の築いた物かそれ以後の物か、多分両方あるのだと思います。旧市街全体が城壁に囲まれていたことは確かです。

オスタルやペンションの案内標識と共に目立つのはアラビア語の標識。標識だけでなく町を歩いているとアラブ風の顔立ちの男、頬ッ被りのアラブ装束の女性も多い。セウタやメリージャのように色々問題を抱える飛び地と違って、ここはれっきとしたスペイン本土の町。しかし、歴史的にも地理的にもトイ面のモロッコとは切っても切りきれない、どうしようもない因縁があるんでしょうね。モロッコ人にしてみれば、もともとは我々の土地だ、という気持ちがドコカにあるに違いない。

タンジール行きの高速双胴船フェリーが出る港、ここから約３１キロを３５分で渡ります。夏には観光客殺到でフェリー乗り場も込み合うのでしょうが、冬の今、この町は殆ど眠っています。市内に多くある宿泊施設も大部分が閉店または開店休業で、営業は４～１０月のみ、というところが多いみたいです。

港の向うに見える灯台のある島、実は細い人工通路で本土とつながっているんですが元々は島だったはず、それはともかく、この灯台がイベリア半島最南端。灯台の左側は地中海、画面の右端に見える海は大西洋です。

この写真はほぼ南西を向いて撮ったものですから、ここから港の入り口のはるか向うにはタンジール方面が見えるはず。もう一度最初の海図で確かめてください。

ところがこの日は天気は良いのに視界はさっぱりで、３１キロ離れたタンジールはもとより最短距離約１５キロの対岸すらハッキリしませんでした。

冬は空気が澄んで一番視界がいいはずなのに、これには全く当てが外れました。

今年の冬は東風が多く、視界の良くない日が多いと言う話を先週したばかりでしたがこの日がまさにそのとおりで、強い東風が吹いていて最悪でした。

真南方向にかろうじて山並みが見えました。これがこの日唯一のアフリカの景観。

良く見えなかったら、部屋を暗くして見てくださいね。上は望遠撮影です。

これは、絵葉書の写真ですが、タリファとアルヘシラスの間の峠道からはこんな風にアフリカが見えるんです。これが始めに言った標高８３９ｍの Sidi Musa。

タリファの町からこの方角、南東を見たら上の絵葉書の山が中央に見える筈なのに、全くのペケでした。強い東風でアフリカ側の山に雲が掛かってしまったんですね。

オベントは東の強風を避けて、町の西側の浜で大西洋を見ながら・・・。白い砂、青い海、蒼い空、の三色旗。カァディスの浜より一段と荒々しく青みの強い海でした。

島は軍事施設で立ち入り禁止。人工通路の最南端から北西方を見たところ。水が奇麗でしょう？　海峡を流れる強い海流・潮流があらゆる濁りを洗い流してくれるから。

通路の先端、島の城門の前にこんな看板がありました。左、地中海、右、大西洋は文句のないところですが、西・英・仏の三ヶ国語でヨーロッパの最南の町、としてあるのには異議アリです。正確な緯度は分かりませんが、ここは３６度線のわずかに南、多分北緯３５度５０数分というところでしょう。この緯度より南にはマルタ島あり、クレタ島等ギリシャの島々もある。だから The Continent＝「欧州大陸」の最南と言わなければ正確ではありません。ギリシャ人が見たら怒るに違いない。最南端と言わず最南の町として、逃げたつもりでしょうが、クレタ島にだってこんな小さな町より大きいトコは沖から見ても一杯あった。「〇〇で一番」は常に胡散臭い。ジブラルタルの南端、ヨーロッパ・ポイントにある土産物屋には The last shop in Europe という看板がありましたが、昔そこが地の果てと考えられていたという故事からでしょう。

街を歩き回っているうちに、いくつかの日本語の看板を見つけました。もっとも日本語と言ったって左の「不死鳥」のような怪しげなものもあります。FU・SI・CHYO と下に書いてあるのが見えますか？　chyo なんてローマ字日本人が使うでしょうか？商売は刺青屋。右の宝石屋は「浪」という漢字だけですから日本人とは限りません。

この二つは、どうやら日本人の姓と認識できますね。左はレストラン、右はナイトクラブらしい。どちらも閉店中で中の様子は分かりませんでした。この町もバルバーテ同様冬の間は眠っているんです。ここも一頃はマグロ漁で栄えたこともあるらしい。その頃住み着いた日本人がいるのかナ？　今では日本に輸出する地中海マグロは殆ど畜養モノになり、町はサーファーだけで潤っているらしい。夏だけの町。＊＊＊

「日本食ブーム」の巻

最近一年間、本屋で立ち読みをする機会が増えて、或ることに気がつきました。オッと、誤解のないように訂正しますが、私達が辞書の助けもなくスペイン語の本を「立ったまま」読めるはずもなく、立ち読みではなくて「立って本の写真を見る」と言うべきでした。スペイン語で書かれた文章は辞書と首っ引きで１頁を１日かけても正確に読み取れるかどうか全く自信はありません。まあ、しかし「聞く」よりはずっと確かではあります。

ソレはともかく、本屋の立ち読みは日本にいるときからの「趣味」のひとつだと言っても良いくらいカナリ頻繁に本屋へ出かけます。買うことはめったにありませんけどね。幸いカァディス旧市街には案外大きな本屋が多く、歩いて行ってそんな本屋を２～３軒回って、また歩いて返ってくると３～４時間はすぐ過ぎてしまい、その間ずっと歩くか立っているわけですから、運動量も十分です。

大きい本屋、と言っても例えば横浜界隈なら有隣堂みたいな大きなチェーン店ではなく、最近の日本では少なくなった個人商店の大きいもの程度です。しかし、前に住んでいたベナルマデナではソレすらなくて、「立ち見」も出来ませんでした。

その点、カァディスは古くから大学のある町だったせいか、旧市街には本屋が多いんです。だから「立ち見」の機会が増えたわけ。しかし、ソレも旧市街に限られていて人口の大部分が住む新市街には私達日本人の感覚で言う本屋らしい本屋は全くありません。この事だけで決め付けてしまうのもナンですが、平均的スペイン人の読書量は絶望的に少ないんじゃないかと思います。

日本では至極当たり前の、通勤通学の車内で文庫本を読んでいる風景は、私達の知る範囲ではゴク稀にしか見かけません。図書館の充実度もオソマツの一語に尽きます。

サテ、冒頭に言った「気が付いた或ること」とは、日本料理の本が増えたように感じられると言うことです。今までは単に私達が迂闊にも見逃していたに過ぎないかもしれませんが、チョット大きい本屋には必ず数冊見つかります。

そして、本だけではなく、テレビ番組でも時々日本料理の紹介を見る機会が増えたようにも感じます。コレはＮＨＫ的なＴＶＥという局でウィークデイの夕方毎日やっている楽しい料理番組です。この番組のことは前にも紹介したのでダブりますが、日本食ブームが必ずしもそのまま手放しで喜べる状態ではない、ということを言いたいのです。折角日本料理を紹介するんなら正しく「日本の味」を伝えて欲しいですね。

この主人公はプロの料理人ではなく、私達と同じ食べること大好き人間が、高じて、料理大好きになったらしい人物、私達同様の食いシンボの延長にいるという点で親しみが持てます。番組名は Vamos a cocinar バーモス・ア・コシナール＝料理をしようヨ。彼の名前は José ホセ。この日のテーマはＳＵＳＨＩ。

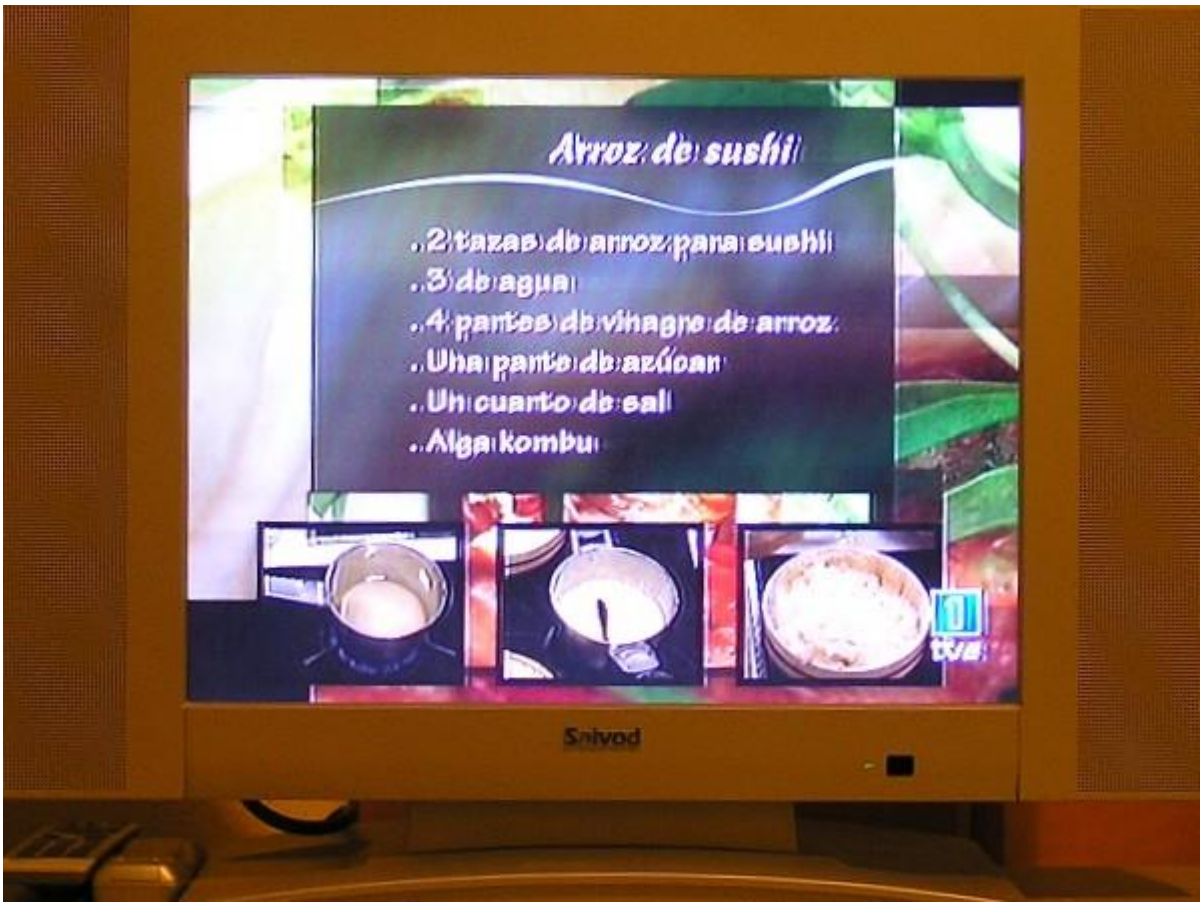
彼は純粋に料理好きなので、一生懸命慣れないＳＵＳＨＩに挑戦していて好感が持てるんですが、彼にＳＵＳＨＩの作り方を伝授した日本人が極めつけのデタラメだったらしいと言わざるを得ません。形だけは一応鮨らしくなっていますが、魚の扱い方、シャリの扱い方、食べ方、どれをとっても感心できませんでした。何故こんな教え方をしたのか全く腹が立ちます。日本人の風上に置けぬ奴。

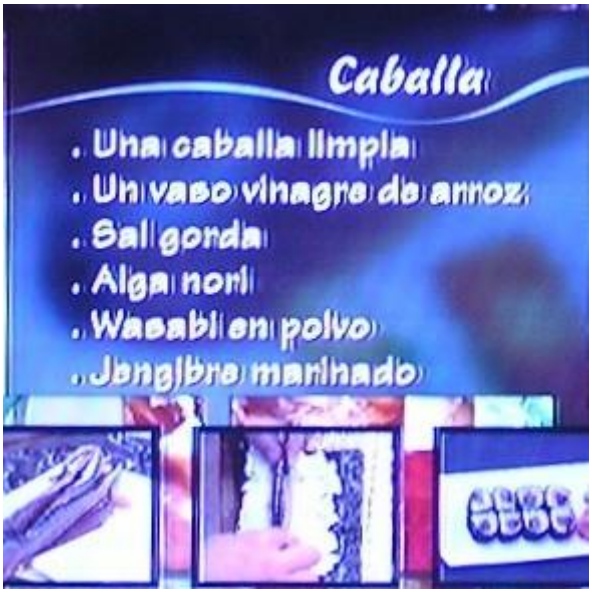
マズ、上の二枚。これは〆鯖で海苔巻きを作ろうというものですが、その〆鯖の作り方たるや、もう見てらんない、という感じで、こんな作り方じゃ腹こわしても知らないヨ、というものでした。鯖のハラワタの汁だってそのマンマですからね。

それに、このシャリの多さ。たっぷりのシャリを細まきにするんです。大きな手で力一杯に巻すを巻き込むもんだから、多分シャリは完全につぶれてるでしょうね。

次に握りに挑戦。アマエビの下のシャリを見てください。エビをモウ一匹乗せてもまだシャリが隠れることはないでしょう。そして、ワサビの乗っけ方の豪快なこと、トテモそのまま食べられる量とは思えませんでした。それにしても、全体に生モノの扱いとしては全く落第。コレじゃ食中毒を起こさないほうが不思議と言うモンです。

でもソレはホセ君の責任じゃありません。彼の従来の食習慣では魚は揚げる、焼く、煮る、が普通で、ナマと言えばマリネーまでですからね。やっぱり、教えたほうが悪い。そして最後に、どうやらその張本人の日本人らしい人物が登場。「らしい」と言ったのは日本人の「フリ」かも知れないから。そして、このＳＵＳＨＩを食べて見せたんですが、それがなっちゃないのは前に言った通り。





上の鮨メシの項一つとっても到底納得が行きません。こんな水の割合で旨いシャリが出来るわけがありません。第一、酢や砂糖や塩の量の基準が私達にはさっぱり分かりません。また、イクラを鱒の卵と言ってますが、鮨ダネとしては普通鮭の卵ですね。このヘンな日本人が唯一立派だったのは、ホセががっぽりワサビを握りこんだ鮨を平気な顔で飲み込んだこと。きっと泣きたくなるほど辛かったに違いないのに。＊＊＊

「カァディスの春」の巻

フィリピンの地すべりはものすごかったですね。レイテ島ばかりでなく、フィリピンの島々には長い期間を通じて多くの回数就航して馴染みがあります。またフィリピン人クルーとは１０数年にわたって多分延べ４００人以上と同船したと思います。決して他人事とは思えません。普段でも只事でないくらい雨量の多い地域なのに、豪雨の為に地すべりになってしまうとは全く異常です。

何度も言って来たことですが、やはり地球は病んでいる、としか言いようがありません。先週カナリーの多雨について触れたばかりですが、普段雨のないカナリーが多雨になっていることも異常だし、普段から多雨のフィリピンで、その程度を超えた極端な多雨の為、大規模な地すべりになってしまうのはもっと異常と言うべきでしょう。

ネットで見る日本の新聞の断片的な報道では、長年の違法伐採も原因の一つではないかと言っているようですが、これには大いに同感です。乗船したての４５年前から何年もの間、いわゆる南洋材と言われるラワン材を何度も日本各地に運びました。ニッポンの高度成長期の並外れた住宅開発はフィリピンから輸入した安いラワン材なくしては成立しなかったでしょう。当時、日本の多くの輸入商社は社員を現地に派遣して材木を買いあさったのです。

そういう姿勢を批判されるようになったのはずっと後になってからで、当初は手当たり次第買いまくったと言っても過言ではないでしょう。違法伐採を助長したと言われても仕方がないほど買い付ける側も売る側も潤ったに違いありません。

また、直接商社が責を負うべきことではありませんが、売る側は伐採をしたら予後手当てとして植林する、というゴク単純な施策をしていなかったのではないか？　文字通りの「あとは野となれ」だったのでしょうね。

また、ラ・ニーニャだったことも原因の一つと指摘されているようです。中部太平洋の赤道海域で海面水温が高くなる現象をエル・ニーニョ El niño 逆に低くなることをラ・ニーニャ La niña と言いますが、前者は幼子イエスと言う意味でこの現象がクリスマス前後に起きることから付けられた名前だそうです。後者はその女性形。

詳しく解説をできるほどの知識はありませんが、これらの現象が南北両極の氷が異常な勢いで溶け出していることから起こる、そしてその原因は大気汚染によると言われて既に久しいですね。

最近、友人に送ってもらったＤＶＤで The day after tomorrow という映画を見ました。ＳＦと言うよりもっと現実感の濃い近未来映画でした。要するに、両極から流れ出す深層海流の異変で地球は再び氷河期を迎える、その前に世界各地で異常気象が頻発する、という気味が悪いほど昨今の地球の状態を言い当てている映画でした。

全世界の政治屋サンと大企業の社長サンに見てもらいたい。

鬱陶しい話はこのくらいにしましょう。先週末のスペインは、まあ、「異常」とは言えない程度の大寒波で、ビスケイ湾に面した北海岸は大荒れ、内陸部は大雪、比較的暖かいアンダルシィアも内陸は雪に覆われました。

ところが、カァディスは寒冷前線通過時だけ雨、その後北西風こそ少し吹いたものの陽だまりでは写真のような具合、ミツバチの忙しい季節になっています。＊＊＊